

母の719 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

道草日記⑥／大野八生 2

わたしの原風景④／土田義晴 3

作者が語る「14ひきのシリーズ」⑨⑩／いわむらかずお 4

新刊紹介／須田研司、松葉口玲子 6ー7

イラスト／南塚直子



さあ、冒険の始まりです！

柴田愛子

カレンダーでの新年は1月ですが、保育・学校・会社などは4月が始まりのときです。新緑を背景に、道を歩く人々の姿も背筋が伸びた新鮮な感じ。けれど、保育園やこども園、幼稚園からは子どもたちの泣き叫ぶ声が聞こえてきます。幼い子どもたちにとっては、親と離れる暮らしが毎日続くなんで、思ってもみなかったに違いありません。命綱である保護者からもぎ取られて、どんなに笑顔の優しいような保育者であっても山姥に見えていることでしょう。

私はなんと保育者生活52年目を迎えます。こうなると新学期が楽しみでしかありません。どんな子どもや親たちが来るかしら？ 何人くらい泣くかしら？ やんちゃ坊主は？ どんな反応もうれしいのです。心がざわつき、揺れて、人と人がつながっていく始まりのときは特別なのです。やがて、子どもは信用する覚悟をして身を任せてくれます。親も子どもの様子から、保育者を子育ての共有者としてつながり始めます。互いに選ばずして出会い、信頼関係を育てていくのですから、現代文明らしくない、人間くさい絆づくりですよ。

私は経験上、先が見通せるからワクワクできるのです。でもね、だれでも初めての体験を繰り返しながら人生めぐっていくのです。それって冒険に近いと思いませんか？ 近年、子どもたちの安心・安全管理におとなが神経を注ぎすぎるあまり、子どもがチャレンジできる機会が少なくなりました。20年くらい前までは、いなくなった子どもを大騒ぎして探すことがたまにありました。見つけた子どもに「心配したよ！」と叱ると「だって、ぼうけんだったんだ」と返ってきました。子どもたちは先のわからないことにドキドキしながらも、ワクワクが膨らんでやってみてしまうのです。そのことが「大きくなっていく」ということにつながっているようです。

子どもたちは冒険の本が大好きです。『おいしいのぼうけん』『エルマーのぼうけん』などなど、その魅力はずっとかわりません。先日「ぼうけんってなあに？」という子どもたちに絵本を読みましたら「ぼうけんにいこう！」となり、地図を片手に知らない道を進みました。おとなたちも先のわからないことに心配を抱えながらも、一步を踏み出してみませんか？ まさに4月、冒険の旅の始まりです！

(しばた あいこ／りんごの木代表)

道草日記 6

大野八生

(イラストレーター・造園家)

すみれ色の春

早

春から春へ。

春の花たちが次々と花を咲かせ、緑が溢れてゆくなか、すみれは、ひっそりと可憐な花を咲かせます。

その小さな花が咲く「ことば」を聞き逃さないように、すみれを見つけるひとときはとてもよいものです。道端、庭の隅、土手の近くなど。彼らは、気まぐれにひっそりと生きています。

私も数種類のすみれを育てていて、毎年たくさんの花が咲きます。しかし、どの品種がたくさん咲いてくれるかは、年によってまちまちです。よく咲いてくれる年もあれば、そうでない年も。丈夫な品種があまりよく育たなかったり、育てるのが難しい品種がよく増えたりすることもあります。そんな気まぐれなところも、なんだかとってもよいのです。鉢植えで育てると、種をパチンと弾かせて飛ばし、いろいろな鉢の空いたところから花を咲かせたりもします。

そしてたくさん花が咲いたら、束ねて小さなすみれの花束にしたり、花を集めて卵白をぬり、たっぷりと砂糖をかけて、乾燥させて「すみれの砂糖漬け」をつくったりしま



す。カリッと乾くと、冷蔵庫に入れておけば半年ほど食べられます。紅茶に浮かべたりケーキにかざってみたり、ほんのりすみれの香りがしてよいものです。ミントの葉などでもできます。

それから、毎年、友人と神代植物公園（東京都調布市）の「すみれ展」というすみれの展覧会に行きます。たいせつに育てられた、たくさんの種類のすみれたちに会うことができます。小さな春のお楽しみです。

また今年も私の庭に新しいすみれが仲間入りするでしょう。

（おおのやよい）

わたしの原風景

42

土田義晴

つちだよしはる／絵本作家



僕の実家は、山形県鶴岡市で旅館をやっていました。旅館といっても温泉や観光旅館ではなくて、街中にある大勢でも泊まれて宴会もできて結婚式もやる、当時はみんな旅籠屋^{はたしや}といってました。旅館といえば美人女将を思い浮かべるかもしれませんが、うちはおじいちゃんがやっている旅館でした。母も手伝っていたので、自然に僕の遊び場は小さい頃から旅館の中でした。ただ、客室に入ると怖いおじいちゃんに怒られるので、絶対に入りませんでした。一番好きな場所は屋上でよくそこに上がっては道を通る車や人を見たり、遠く山や空を見上げて寝転がっていました。

あるとき、プロレスの団体が宿泊してきました。旅館での僕の唯一の仕事が、玄関で、お客さん用のスリッパを並べることでした。その日もスリッパを並べていると、下足番のおしちゃんが僕を呼び、「よっちゃん。この靴はいてみな」と真っ黒くてピカピカ光る立派な革靴を指さしました。そーっと足を入れてみると、あまりの大きさに足がズズーと奥に入って軋びそうになりました。「この靴、馬場の靴だよー」とおじいちゃんは笑いながらいました。ああ、あのジャイアント馬場かあと驚いたものです。そのあとロビーに、天井に頭がつきそうな大きな大人たちがやってきました。でもなかなか馬場がやってきません。僕はこっそり二階の部屋に行ってみたのです。襖をそーっとあけてのぞいてみると、部屋の端から端に届くくらい大きな馬場が、布団をかぶって寝ていました。そのときのドキドキは今も忘れられません。

小学生になってから、僕がいつものようにロビーでテレビを見ていたら、奥から宴会を終えた人たちがぎやかに出てきました。小学校の先生たちでした。いつもむずかしい顔をした校長先生も、みんな真っ赤な顔してご機嫌で、知ってる先生にあいさつすると、みんな僕の頭をなでて帰っていきました。大人になるってこんな感じになるってことなんだなあと、子どもながらに思いました。

いつの間にか、僕もすっかりご機嫌な大人になってしまいました。

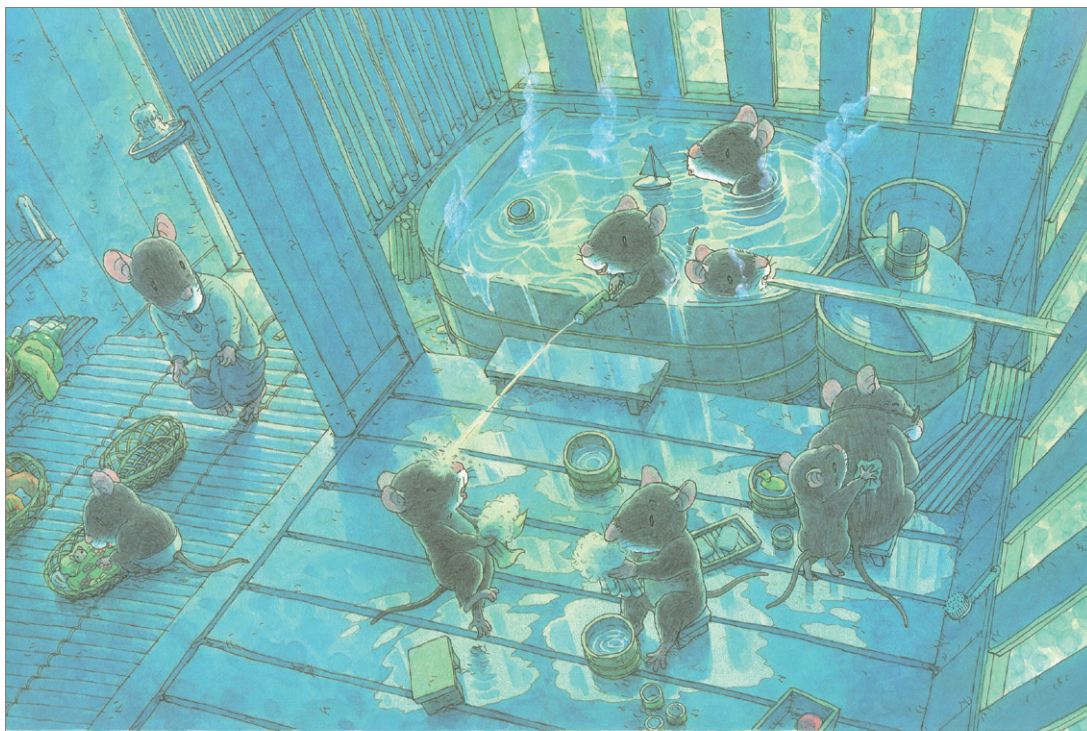


14ひきのこもりうた

いわむらかずお／さく
1994年7月刊行

おふろに入って、ゆうごはんを食べて、そろそろねる時間。こもりうたが聞こえてきたよ。

作者が語る 「14ひきのシリーズ」 いわむらかずお



せっけんの あわ ぶくぶく。につくんの くちびる ヒリリ。

おじいさんの せなか ひろいね。おふろばに よるの くうき。

9 「14ひきのこもりうた」

夕方から眠りにつくまでの日常のありふれた時間を描いたのが『14ひきのこもりうた』です。日々の暮らしのなかで、家族みんなが一緒にいる幸せなひとときでもあります。

ちょうどこの絵本を描いていた頃、自宅のお風呂場が古くなってきて、改築しないといけなくなりました。工事のあいだはお風呂に入れないので、庭に仮のお風呂場を作ることになりました。

『こもりうた』の下絵を大工さんに見せると、「昔はみんなこうだったな」と言って作ってくれたんです。できたお風呂に孫と一緒に入って、仕上げていったのが、14ひきたちのお風呂場なんです。

お風呂に入る場面では、「ゆげの におい、けむりの におい、ゆうがたの におい」という言葉があります。私が思い出すのは子どもの頃のお風呂場です。戦後間もないころ、父親が庭に作ったバラックのお風呂場のおいなんです。ドラム缶を石の上に置いて薪を焼くお風呂で、薪の煙のにおいが混ざった湯気のにおいですね。

最後は音が印象的な場面です。「きこえるよ、おゆの おと、おけの おと、おかあさん おはあさんの わらいごえ」と、絵で表現するのが難しい音を言葉で表現しています。においや音についての言葉が寄り添うことで、絵に広がりができますね。絵本の言葉の持つ大事な役割のひとつです。

また、見返しには、「こもりうた」の楽譜が載っています。「さとうきび畑」の作詞・作曲者の寺島尚彦さんに作ってもらったんです。ぜひ歌ってみてください。ねむくなりますよ。

『14ひきのかぼちゃ』は、九八年に開館する「いわむらかずお絵本の丘美術館」の準備の真っ最中に作りました。

美術館の活動の趣旨のなかに、「里の自然は農業が支えている」という捉え方がありました。その頃、「えほんの丘農場」の主だった作物のなかにかぼちゃがありました。朝早くかぼちゃ畑に足を運び、花やそこにくる昆虫たちの様子を観察しました。

絵本は「これは かぼちゃの たね、いのちの つぶだよ」というおじいさんの言葉で始まります。種がこの絵本の主人公と言ってもよいでしょう。みんなで種を蒔き、芽が出て、成長し、実る。そして収穫して美味しく食べる。どんなふう成長していくかを愛情深く見守る「14ひき」の子どもたちの発見や喜びを、そこに重ねています。

かぼちゃが育つのに大切なものは「土」「太陽」「雨」「昆虫」など、そして陰暦のある東洋的な捉え方ですが、「月」も成長に大事な役割を果たしていると思っています。これは『おつきみ』にもつながる考え方ですね。

かぼちゃは月の光を浴びて、かえるやおろぎの歌を聞いていておいしくなる。まわりの生き物と一緒に生きているんですね。

最後の場面はかぼちゃ尽くしの食卓です。コロッケからパイ、煮付けまで全部次男に作ってもらって、それを見ながら描いたんです。美味しそうでしょう。

種が主人公と言いましたが、前見返しでは縦に、後ろ見返しでは横にかぼちゃを切って、種を見せています。表紙はかぼちゃの皮の緑で、開くと中身の黄色が出てくる仕掛けになっています。絵本ならではの立体表現ですね。

10 「14ひきのかぼちゃ」



どてっと みのった、ぼくらの かぼちゃ。 ほーら みて みて、 おかあさん おばあさん。かまきりも とんぼも みにきた。



14ひきのかぼちゃ

いわむらかずお／さく
1997年4月刊行

おいしいさんがもっていた
いのちの種。みんなで
まいて、だいにそだて、
りっぱなかぼちゃになりました!

昆虫と人間にとって一番身近な生きもの

須田
研司

くらべてわかる！
こんちゅう図鑑

須田研司／監修
グループ・コロンプス／編
定価各2420円(本体2200円+税10%)



①つかまえ方とかい方



②からだのつくり



③おとなになるまで



④食べ物とすみか

この地球上には昆虫たちが数えきれないほど存在していることをご存じでしょうか？地球上の全ての生物を合わせると130万種を超えると考えられています。その中で昆虫は約100万種、地球上に生息する生物の約4分の3を占めています。人類の起源や恐竜の繁栄の時代よりも遥か昔から命をつないできた昆虫は、様々な環境に適応し多様な進化を遂げ、生き残るために必要な能力や機能を身につけてきました。本書では、昆虫の体のつくり、成長の仕方などを、4編に分けて紹介しています。

昆虫と一口に言っても、その姿形は実に様々。『からだのつくり』では、子どもたちでも知っている有名な昆虫10種類と昆虫ではないダンゴムシ・クモの2種類を見開きのページで紹介しています。昆虫の体やその特徴がわかりやすいように大型の写真を使って構成しているので、是非、見比べてみてください。

昆虫にとって、幼虫期はひたすらエサを食べ続け、大きく成長するための期間、サナギは成虫へと変化するために体を一から作り変える大事な時期、そして成虫期はパートナーと出会い、子孫をのこすための繁殖の時期です。『おとなになるまで』では主に昆虫の変態について取り上げています。

昆虫は草むらの茂みや木の幹、朽ち木の中、石の下、土の中、池や沼、川など、様々な場所に隠れて生活しています。昆虫にとって、すみかとはエサ場であり、外敵から身を守るための隠れ場所、子孫をのこすための繁殖の場所になっています。『食べ物とすみか』では、成長過程で利用する環境や食べ物を紹介しています。

『つかまえ方とかい方』では捕まえ方のポイントや昆虫の持ち方、飼育の仕方が記されています。昆虫によって見つけ方や捕まえるコツ、使用する道具に違いがあります。ただし、昆虫を捕まえた時や飼育する時には細心の注意が必要になります。本書を読んで正しい触れ合い方を学びましょう。

地球上には数えきれないくらいの昆虫が生息していますが、そのほとんどが1センチメートルに満たない存在です。体の小さな昆虫たちは私たち人間にとって取るに足らない存在かもしれませんが、しかし、その小さな体には溢れるほどの魅力が詰まっています。今一度、昆虫という小さな命に目を向けてみてはいかがでしょうか？もし、少しでも興味が湧いたのなら、是非、野外に出て昆虫を探してみてください。見つけた昆虫を調べることで、自然への興味がさらに深まり、新しい発見があるかもしれません。本書を読んで、昆虫たちのことを知っていただければ幸いです。

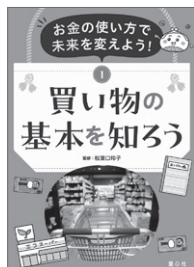
(すだ けんじ／むさしの自然史研究会代表)

お金がなぜ大事なのかについて考えるきっかけづくりに

松葉口 玲子

お金の使い方で
未来を変えよう！

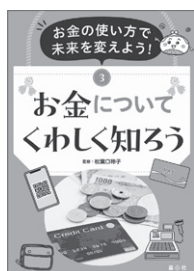
松葉口玲子／監修
303BOOKS／編
定価各3520円(本体3200円+税10%)



①買い物の基本を知ろう



②商品とお店を上手に選ぼう



③お金についてくわしく知ろう



④エシカルな消費をしよう



⑤お金のトラブルをなくそう

昨今、新NISAであるとか「貯蓄から投資へ」といった用語を耳にすることが増えたのではないのでしょうか。子どもたちが学校で学ぶ学習内容でも、お金や金融に関わる内容が増えました。

かつてはお金について口にすることは恥ずかしい雰囲気の時もありましたが、無駄遣いをしないようお小遣い帳へ記帳する経験を多くの子どもたちがしていました。家庭科の学習内容に家計簿記帳が入っていた時代もあり、昭和の高度経済成長期には政府による貯蓄増強運動もありました。一方、今日ではキャッシュレス化が急進展し、現金を見ることなく「見えないお金」を管理しなくてはならない時代です。マーケティングの進展とともに身の回りには欲しいものが溢れているなか、「入るを量りて出ずるを制す」という当たり前のことも、今の子どもたちにとっては難しいかもしれません。

私たちの生活の多くは、時間とお金の使い方で成り立っていますが、一人あたりに与えられている時間は一日24時間、つまり世界中共通で誰にも平等に与えられています。一方、お金については国によって物価も違いますし、人によっても差があります。よく「お金は大事」と言われますが、自分が豊かな生活を過ごすためだけでなく社会全体が豊かになるためにも重要なものです。社会全体のウェルビーイングなくして個人のウェルビーイングも成立しないからです。まずは自身自身が生きるために大切なお金の使い方について考えることからスタートして、そこからさらに社会経済全体へと視野を広げ、個人と社会のウェルビーイングを探究する力をつけてほしい。そのような願いをもって本書を監修しました。

第1巻『買い物の基本を知ろう』では、普通に生活するだけでお金がかかる＝お金を意識することからスタートし、お金を得ること＝将来どのような仕事に就くかについて意識を向けさせ、黒字と赤字が基本であることを抑えたうえで、第5巻までの全体を俯瞰した案内的な位置づけになっています。そのうえで、第2巻『商品とお店を上手に選ぼう』、第3巻『お金についてくわしく知ろう』、第4巻『エシカルな消費をしよう』、第5巻『お金のトラブルをなくそう』というように、それぞれ詳しい内容が続きます。

お金についてわかりやすく書かれた本は散見されますが、「消費者としての子ども目線」でわかりやすく、なおかつこれだけ広範囲に扱った類書はなかったのではないのでしょうか。大人にとっても、お金の使い方についてあらためて考えるきっかけになるものと自負いたします。一人でも多くの方に読んでいただければ幸いです。

(まつばぐち れいこ／横浜国立大学教授)

4月の新刊図書！

いばらの髪のアラ 〈I〉黄金の心臓

日向理恵子／作

吉田尚令／絵

定価1540円（本体1400円＋税10%）



アラは、自分の意思ではなく驚いた拍子にしか魔法をかけることができない落ちこぼれの魔女。姉さんたちのお荷物だと思いながら暮らしていたアラは、〈黄金の心臓〉を探し求めて、地上へと旅立つ。



イラスト／南塚直子

「母のひろば」では、
読者のみなさまの声を求めています。



「母のひろば」は、読者のみなさまと、子どもの本の作家・画家が交流する広場として、1963年に創刊されました。60年以上の歩みのなかで、読者層や情報発信のあり方も次第に変化してきましたが、変わらず発行を続けております。「母のひろば」に対して、読者のみなさまが求めているものは何か、みなさまのご意見を伺い、誌面に反映させていきたいと考えています。今号から2カ月にわたり、アンケートを実施します。同封のはがき、または下記QRコードより、みなさまの声をお寄せください。（編集部）



2024年4月15日発行（毎月刊）
母のひろば 第719号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：橋口英二郎
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：坂本梓 ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。



あとがき

●21,837人。2023年に自死を選んだ人の数です。小中高生は513人。希望を語ることの難しさを突きつけられています。原因や動機は学業不振、進路や入試に関する悩み、学友との不和（いじめ以外）が多く、学校が安心できる場所ではないのです。子どもたちを追い詰めているものは何か。彼らの傍で、言葉にできない思いにも耳を澄ませます。 H

●最近は詩を持ち歩くようにしています。詩集を持ち運ぶのではなく、好きな詩を思い出して、暗唱してみるのです。それは何かあったときに履きかえられる靴があるのと同じで、身動きできない心を軽やかにして、ときに救い出してくれたりします。他者の言葉を借りて、ほんの少し自分を超えられたとき、人間でよかったと思えるのです。 N